

山居乱信

1

僕の家は破れ家だが
窓ガラスは透明にみがいてある
西日が射しこんで来てゐた
僕は家の者にともなくつぶやいた
「外は風が強く吹いてゐるみたいだね」
無言なので ふりかへると
光が家の者の頬を染めてゐた

2

室の壁には鏡がはめこんであつて
両側から僕たちの姿を無限に映し出してゐた
うすみどりの衣服の裾がはつきりと折れて見える
鼓動が乱れてしづけさの中では異常に高まつて感じられた
(ここは野原ではないから 僕たちは虫ではない)
「虫だつたらどんなによかつたらう」
複眼だから 多数の草の葉
たくさんの君の姿 数かぎりない心の屈折
長い足と羽で跳躍して
自分たちにもわからない場所に行つてしまふことも出来るし
(虫の声が聞えて来る)
「僕たちは虫ではないものね」
いまは ただしづかに目を閉じてゐることにしよう

3

障子を細目にあけると
前面に 山と空のあはひはさだかではないが
通つてきた坂道が迎れる
「何をごらんになつてゐるの」
蛍光燈の行列が遠く白く斜めに高まつてゐる
橋を渡つた時には互ひにすねてもみあつた
僕のポケットから万年筆が飛び跳ねた
闇の中でさかんにゆれてゐる若葉 その上に落ちて行つた
頭上の蛍光燈は氷菓子のやうに白く水つぽかつた
「ここから見ると蛍光燈が針の行列のやうに見えるわ」
互ひのこころも平安になることが出来た
自動車のテールランプがどンドン下つて行く
見届けることをしないで障子を閉めた

「僕は万年筆を失ったけれど君を得た」
あの時 あれは小刀のやうに谷間に落ちて行つた

4

「日がみじかくなつて来たといふのでせうか」
家の者が言つた
煙草を手にしながらしばらくのあひだ僕は答へなかつた
あるかなきかわからなくなつた日射し
机や 灰皿や
僕の眼は色々な物体を追つてゐた